

阪神淡路大震災から11年、当時の中部方面総監以下関係者が一堂に会した。亡くなられた6434名の方々の御霊の安らかならんことを祈っての黙禱の後、往時を思い出してそれぞれ歓談した。

その宴会場の敷地、中央区日本橋3丁目に、(中央)区民史跡「秤座」が在ることを偶々発見した。大通りから一本入った所なので、小生のウォーキング経路であっても気付かなかった。秤座なるものの存在を知らなかったので、秤座やそれらに関連する「座」について色々と調べてみた。

その結果、度量衡の基準統一のための「枡座」「秤座」「分銅座」、貨幣の鑄造組織である「金座」「銀座」「銭座」「大判座」が設けられ、また朱肉や朱墨などに使用される「朱」の製造販売を独占的に行なう「朱座」が設けられていたことを知った。

その概要を記す。

① 秤座



秤座は秤の基準の統一のために江戸幕府が設けた特権的職人の組織である。碑文には、『秤座は甲斐の武田氏の治下で、秤の製造を業としていた守随家の二代目彦太郎信義が江戸に出、関八州の秤を司ることを願い出て家康の許しを得、幕府公認の秤商になったことに始まります。その後、幕府は、東国33カ国を江戸の守随家に、西国33カ国を京都の神家にそれぞれ分掌させ、秤製造・販売、秤検査の極印料取り立ての権利を独占させました。』とある。

秤座は、承応2年(1653)から明治8年(1875)、明治政府が「度量衡取締条例」を発するまで続けられた。秤座の位置は中央区の中で移転を繰り返したが、天保13年(1842)以降箔屋町に所在した。

② 枡座

枡とは穀物などを計量する容器である。江戸開幕当初から江戸にあり、後年、京都にも開設され、二ヶ所の枡座が東西を二分して、受け持っていた。面白いことに、寛文9年(1669)以前は東は江戸升(ます)、西は京升を用いていたと言う。然しながら、問題もあるので、江戸枡の分量を京枡と同一にして統一した。枡座の印のないものの使用は禁止された。江戸枡座は樽屋藤左衛門、京都枡座は福井作左衛門が管掌した。

③ 分銅座

分銅座については現在のところ明確になっていない面が多いようだ。寛文5年に、後藤四郎兵衛以外の者が制作した「似非分銅」の使用禁止が告示されている。江戸後藤家は、本両替町現在の銀座1丁目に住んでいたのもので、その近辺か屋敷内に分銅座が在ったのだろう。

④ 金座

金座では、大判を除く小判と一分金の金貨幣を鑄造した。金座は京、佐渡にも置かれたが、佐渡は後に廃止された。文禄4年、大判座の手代であった橋本庄三郎が後藤家の養子になってはじめた。金座は現在の日本橋日本銀行の地に設けられた。

⑤ 銀座

銀座と言う地名は全国に600近くあると言われている。座の中では最も有名である。銀座では、丁銀や豆板銀の銀貨を鑄造した。駿府に在った銀座を慶長17年(1612)に江戸に移した。銀座は当初は江戸の他京、大阪、長崎にも在ったが、寛政の改革の際に4銀座は廃止されたが、後に江戸銀座は再興された。銀座の在ったところは新両替町と呼ばれて呼ばれたが、通称は銀座であった。銀座は、銀貨鑄造役人の汚職事件により、蠣殻町に移されたが、新両替町の名前は残った。通称の銀座が町名になったのは、明治2年(1869)である。銀座2丁目に「銀座発祥の地」の碑が在る。



⑥ 大判座

金貨の大判は贈呈・賞賜に用いられ、一般には流通しなかった。後藤四郎兵衛が鑄造した。大判座は、幕命により大判の改鑄が行われる時だけ開設される非常設の役所であった。分銅座も大判座の開設に応じて併設されたのではないかと推測されている。

⑦ 銭座

幕府が寛永14年(1637)に寛永通宝を全国に流通させるために、当初は江戸と近江に、後には全国各地に設置した。然しながら、明和2年(1765)になると金座に銭貨鑄造を任せることにした。都下亀戸2丁目には、亀戸銭座モニュメントが建立されており、銅貨製造工程の一分がレリーフに描かれている。亀戸銭座では、しばしば銅銭や鉄銭を鑄造したという記録がある。

⑧ 朱座

江戸幕府は、慶長14年(1609)、漆器・朱肉の塗料として珍重された朱の製造所である朱座を、江戸、奈良、京、大阪、堺、長崎に設置した。江戸では竹川町現在の銀座7丁目当りにあった。